
死神の葬送曲

sunnysing

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の葬送曲

【Nコード】

N9167H

【作者名】

sunnysing

【あらすじ】

死神の仕事。それは魂を狩ることではなく、守ることにあった。今日も今日とて、死神は駆ける。その身を削り、一人でも多くの魂を救う為に。生前よりも生にしがみついた彼らの葬送曲は、何処で終わりを迎えるのだろうか・・・？

序曲 少年と少女

薄汚い部屋の中、小さな窓から差し込む一筋の光を頬に受けながら、少年がベッドに腰掛けていた。黒いトレンチコートに身を包む少年の銀色の癖の無い髪は、流れるように彼の左目を隠している。残った右目で、少年はベッドで死んだように眠っている少女を眺めていた。

温かな布団に包まっている少女の寝顔は可愛げがあつて、見ていると癒された。だが、少年はもう行かなければならない。

「行つてくるね、スノウ」

声変わり前だが普通よりは数段低いいつものトーンで、少年は眠り姫に挨拶を告げた。名残惜しげにそつと少女の頬を手の甲で撫でてから、少年は重い腰を起こした。こつこつと落ち着いた足音を革靴で立てながら、彼はドアに向かい、そのまま部屋を出て行った。

序曲 少年と少女（後書き）

この銀髪の少年が、この物語の主役です。少年の心情描写は最初の頃はあまり無いのですが・・・（汗）

第一曲 Part・1 分かってるよ、お葬式でしょ

低い念仏を唱える声がする。誰もが頭を垂れ、黒い旋毛をこちらに向けている。

自分と全く同じ顔をした死体を入れた棺に座っていた少女は、どこか不服そうな顔をしていた。

どうしても気になってしまふのは、やはり父と母の頭だった。旋毛のところかどことなく禿げていて、老けを感じさせる。今まで気にしたことも無かったから、なんとなく切なくなつた。

(それにしても)

少女は改めてぐるりと首を回し、会場を見た。

(こんなに大勢来るとは思わなかつたなあ)

たった一人、自分の葬式のためだけに。夏休みが終わつたばかり、この改めて気を引き締め、受験に向かつて行かなければならない大切な時期に、受験生である同学年の友人達が来ていたのは意外だった。だが、嬉しくもあつた。大切に思われていたんだと実感することが出来たから。

(私、もつと生きたかつた)

こんなに周りに受け入れられ、大切に思われていたと分かつていたら、あの時車が勢いよくやって来たときも、馬力で避けることが出来たかも知れない。喧嘩別れになつてしまったあの子とも、仲直りしておけば良かった。恋の悩みを打ち明けたら裏切られてクラス中に真実を暴露したあの子も、今なら許せる気がする。

だがもう、どうしようも出来ない。自分は死んだんだ。少女は、何回目か分からないため息をついた。この葬式に来ている誰一人として、棺の蓋に腰掛けている自分に会釈してくれない。見えないのだ、魂だけとなつてしまった、幽霊のような今の自分が。死んでから初めて自分がどんな存在だったのかを知り、幸せに浸ると同時にどうしようもない死という境界線に絶望していた少女は、気づけば

涙を零していた。

だが、恥ずかしくも何ともなかった。どうせ誰も気づきやしないんだ。何をしようと自由。人目を気にせずにいられるって、なんて幸せなんだろう。それだけは、死んでよかったと思える点だった。

少女が派手に鼻をすすり、制服の袖で乱暴に目頭に溢れる涙を拭いた時だった。

「佐伯亜里沙さん、ですね」

左の後ろの方から、突然声がした。それは確かに自分の名前だったから、少女はひどく驚いた。今の自分の姿は、誰にも見えないはずなのに。もしかして靈感を持っている人がいるのだろうか。それとも同族の幽霊だろうか。聞き覚えの無い声なのに、友達や家族だったらと期待して、少女は恐る恐る振り向いた。

第一印象は、幼い少年だった。おそらく年下だろう。珍しい銀色の髪は少年の左目を隠しているが、右目は白人のそれよりも純粹に蒼い。黒いトレンチコートのせいで、ただでさえ目立つのにそれらが余計に映えて見える。その上に陶磁のような白い肌だ。人を通り越して人形か何か、作り物の類に見えてくる。

「あなた、誰？」

見知らぬ人に対する言葉としては当然の言葉を少女は言った。少年は純粹な問いに対し柔らかな笑みを返しつつ、見知らぬ人に対する自己紹介の言葉としては有り得ない言葉を言った。

「死神です」

第一曲 Part・2 銀髪の死神

「・・・死神？」

少女 佐伯亜里沙は思わず聞き返した。聞いたことが無いわけではなかったが、そういう非現実的なものは本や漫画の中でしか存在しないだろう。現実にいるはずがない。

だが、少年はこくりと頷いた。つまり、死神だと肯定した。

「あなたも幽霊でしょう？死神がいてもおかしくないじゃありませんか」

「あ・・・そっか」

確かに、と亜里沙は頷いた。生きている間は幽霊がいるなんて思えなかったが、現に自分が幽霊となってしまった今は、死神がいると言われても分かる気がする。

だが、もし本当に少年が死神だとしたら、自分はどうなるんだろう。昔読んだ漫画では、死神は魂を狩って食べて命を繋いでいるではなかったか。となると、自分も食べられてしまうのではないだろうか。そこまで考えて、亜里沙は震え上がった。大人しそうな顔で微笑んでいる目の前の少年が、急に恐ろしい化け物に見えてくる。「じゃあ、私を食べるの？」

少年は右目だけで亜里沙を見据えた。その動作すらも、亜里沙には肉食獣が草食動物を見るようにしか思えない。

少年は、全身全霊で恐怖を訴える亜里沙から一歩離れた。そして両手を少しだけ上げて、安心させるような素振りを見せた。

「死神とは、魂を狩るものではありません」

少年の落ち着いた声音に、亜里沙の瞳は恐怖から次第に疑問へと変わっていく。それは少年にとってはいつものことだった。

「死神の仕事をご説明しましょう。この世界の仕組みと共に」
これも全て、マニュアル通り。

第一曲 Part・3 世界の仕組み

「人は、死ぬとまず魂と身体が分かれます。そして、今の亜里沙さん、あなたのような所謂幽霊ゴーストの状態になるのです」

亜里沙は頷いた。少年は続ける。

「幽霊ゴーストとなった魂は、死後の世界へと行きます。そしてそこで、生まれ変わるために何年か過ごさなくてはなりません」

「どうやったら生まれ変われるの？」

「亜里沙さん。あなたには首輪が付いているでしょう？」

「え？あ、うん。そういえば・・・」

亜里沙はそつと、自分の首に巻かれた首輪に触った。今の自分は鏡にも映らない存在なので首輪自体を見てはいないが、皮製のそれが付いているのは感じる。何の飾りのつもりなのか、その首輪から一本の短い鎖が垂れていた。どちらも、亜里沙が幽霊ゴーストになってから気がついたものだ。

「その鎖は、いくつ連なっていますか？」

「ええと・・・」

亜里沙は鎖を数えた。

「7つ」

「その通りです」

少年は頷いた。細い指で器用にコートの上のボタンを外し、首元をさらけ出す。そこには、亜里沙と同じように首輪が付いていた。黒い皮製の首輪だ。首輪から垂れる鎖に、3つの綺麗な石が嵌っていた。それぞれ色が異なっている。上から赤、青、黄色だ。

「死んだ者は皆、同じように首輪を嵌められ、その首輪には鎖が7つ連なっています」

亜里沙は頷きつつも頭の片隅で気づいた。この少年も、かつては生きていて、何らかの理由で死んだ存在なんだ。

「その石はお洒落？」

「いいえ。これは次なる石です」

分らない、と首を傾げる亜里沙に、少年は丁寧ネクストーンに言いなおした。

「次なる石、すなわち次の生ネクストーンへ向かうための石ストーンです。略して次なる石と呼んでいます」

「次なる石・・・」

亜里沙の瞳が少しだけ輝いた。少年は亜里沙を興奮させないようにと出来る限りの配慮をしつつ言った。

「次なる石を7つ集め、首輪から垂れる7つの鎖の穴に嵌めると、幽霊ゴーストは自動的に生まれ変わることが出来ます」

瞬時に亜里沙の瞳が輝いた。興奮し、身を乗り出す。

「その石、どこで手に入るの?!」

「死後の世界、もしくは悪夢の道です。特定の場所とは決まっていないので、その2つの広い範囲を日々暮らしながら探すしかないですね。一つとところに留まって石が転がり込んでくる幸運を待つもよし、死後の世界中アフターランドを旅して探すもよし。まあ、そう簡単には見つかりませんよ」

「そうなんだ・・・」

亜里沙は見る間に落ち込んでいった。期待の光が消え、瞳は漆黒に染まる。少年はそんな亜里沙を元気付けようと言った。

「時間は掛かりますが、最後にはちゃんと転生出来ます。主に一つところに留まって偶然の幸運を待つ幽霊ゴーストばかりですし、そう絶望的にならなくとも大丈夫ですよ」

亜里沙はまだ少し弱っているようだったが、瞳に光を取り戻し、首を上げた。少年は話を続ける。

「死後の世界アフターランドまでは悪夢の道ナイトメア・ラインを通っていかなければなりません。死神の事は、幽霊ゴーストを無事に死後の世界アフターランドへ送り届けることなのです」

「ちよつと待つて」

亜里沙は手を上げて話を制した。少年は素直に口を閉じる。亜里沙は顎に手を当てて考え込む動作を取った。

「ここまでの話はなんとなく分かったの。だけど、次なる石ネクストーンは悪夢ナイトメア・ライン」

の道にもあるって言うてなかった？ どうして死後の世界限定なの？」

「確かに次なる石は悪夢の道でも見つけられます。死後の世界より

も見つかる確率が高いくらいです。ですがその分、悪夢の道は危険

地帯でもあるので、通常の幽霊の方にはご遠慮戴いております」

「どうして？」

「悪夢の道は怨霊の巣窟ですから」

亜里沙は眉を寄せた。

「怨霊？ やっぱりそれって危険なの？」

怨霊というと、現世では危ないものとして捉えられる。怨霊に取り

付かれた人のためにお祓いをする陰陽師もいる始末だ。この死神の

少年がいう怨霊も、やはり同じ類なのだろうか。

「はい」

少年は神妙に頷いた。

「怨霊は、幽霊や同族の怨霊を見境無く襲います。強いものが弱い

ものを飲み込み、合体し、更に強くなります。同族同士ならそれで

済みますが、襲われたのが幽霊だとまた違ってくるのです」

「どう違うの？」

少年の神妙な雰囲気、亜里沙も心なしか声が低くなっていた。

「幽霊と怨霊は、そのままでは合体出来ません。水と油のようなも

のなのです。代わりに、傷を付けられた幽霊は、その傷に込められ

た怨霊の特異な力によって喰われ、やがて怨霊となってしまうので

す」

「そんな・・・」

亜里沙は震え上がった。先ほど少年を警戒していた時よりも更に上

の恐怖を感じた。

「怨霊に感情はありません。獣同様です。怨霊は常に自身の身体を

駆け巡る痛みに苦しみ、それが故に暴れまわると言われています。

あくまで予想ですが、それよりもはつきりと分かっているのは幽霊

が怨霊に変わり行く過程が死ぬほど苦しいということです。それは

拷問のようだ」と

亜里沙は恐怖に声が出なくなつた。少年は続ける。

「怨霊は転生することが出来ません。つまり、一度怨霊に傷つけられたが最後、完全に身体が変化する前に次なる石を7つ集めないと転生は出来ないのです。しかし残された時間は少なく、多くの幽霊が7つの次なる石を集めきる前に怨霊へと成り果てていきました」少年は淡々と話しているが、聞いている側の亜里沙の身体は細かに震え、顔は青褪めていた。

そんな亜里沙に、少年はいつものように小さく笑いかけた。

「大丈夫です。僕が守りますから。死神は怨霊に対抗し得る特別な力を使えるんです。亜里沙さんには傷一つ付けさせませんよ。それが僕達、死神の仕事なんです」

「ありがとう・・・」

亜里沙は震える身体を両手で抱きしめながらも、やっこのことで礼を言つた。

「あの、あなたの名前は？」

少年は柔らかに笑つた。

「本当の名前は業務上お教えできません。ですから偽名でお答えしましょう。僕はラグナです」

「そっか。私は佐伯亜里沙・・・って、そういえばさっき私の名前呼んでたよね？」

「死神局ではお客のリストが作成されていて、僕達死神はそれぞれ担当を割り当てられますから。今回の担当は亜里沙さんだった、それだけです」

「・・・そっか」

亜里沙は力なく笑つた。

第一曲 Part・4 さあ、行こう

少年 ラグナは、右の掌を見た。すると突然、掌からバーチャルの画面が飛び出してきた。画面は携帯電話のような構造になっていて、上半分は人物の画像、下半分はボタンが並んでいる。亜里沙は驚いて腰が抜けるかと思った。いくら死んでから非現実的なことが現実だと理解しても、やはり驚く時は驚くのである。

ラグナは口をあんぐりと開けている亜里沙は気にせず、ただ画面だけを見ていた。女性の人物画像がラグナに話しかける。

「こちら死神局管理センターです。偽名をどうぞ」
「オートネーム」

「ラグナです」

「認証いたしました。ご利用をどうぞ」

画面の向こう側の女性は忙しそうに画面の下で手を動かし、キーボードを打っているかのようだった。

「今回の担当である幽霊ゴースト、佐伯亜里沙を確保。只今より任務を開始します。悪夢の道への接続を要請します」
「ナイトメア・ライン」

「了解しました」

ブチツとテレビが切れるような音を立てて、ラグナの掌から出ていたバーチャル画面が消えた。ラグナは平然と手を下ろす。その様子を、亜里沙は一部始終ぼかんと口を開けてみていた。

「今の何？」

ラグナは亜里沙の方に首を向けると、少しだけ微笑んで答えた。

「現世でいう、携帯電話のようなものです。昔は実際に携帯電話を使っていたらしいんですが、死神が怨霊ベンジフルとの戦闘中に落しやすいくらいのこと、掌に端末を埋め込ませるようになりました」

「へ、へえ・・・」

答えつつも頬がびくびくと痙攣していることに亜里沙は気づいた。

戦闘中に携帯を落すって、どれだけ激しく戦うんだらう。そう思うと少し怖い。

そんなことを思っていると、ふおん、と音がした。見るとラグナの横の空間が歪んでいる。歪みはどんどん大きくなり、やがて等身大の黒い穴を生み出した。中には違う空間が広がっているようだ。荒涼とした岩山の景色が薄っすらと見える。

まさかと思いつつも嫌な予感のあまり黙っていると、ラグナが言った。

「ここからは悪夢の道となります」

ナイトメア・ライン

(やっぱり)

亜里沙は溜息をつきたい気分だった。どう考えても、いかにもおどろおどろしい化け物の類が出てきそうなところだ。

「現世に思い残しはありませんか」

ラグナが思いやりを込めて言った。亜里沙は慌てて自分の葬式会場を見渡し、家族と友達の顔を特にしっかりと目に刻みこんでからラグナに向き合った。

「うん。・・・たぶん」

「では参りましょう」

ラグナが促すように言い、先に穴に足を踏み入れた。跨ぐようにして両足ともがあちら側の土を踏むと、ラグナはこちらを振り向き、尻込みしていた亜里沙に手を差し伸べた。亜里沙は更に戸惑った。

「大丈夫です」

ラグナはそんな亜里沙に笑いかけた。その笑みは優しげで、でもどこか寂しさを感じさせるものだったから、亜里沙は思わず見つめてしまった。

「必ず僕が守ります。さあ」

亜里沙は渋々といった感じで手を伸ばした。が、後数センチというところでその手は行く先を見失ったかのようにならなくなった。その距離をラグナは身を少し乗り出して手を更に伸ばし、一気に縮めて亜里沙の手を掴み、引っ張った。

第一曲 Part・5 怨霊痕

ナイトメア・ライン

悪夢の道は荒涼とした山道のような所だった。色としては、荒々しい赤茶色の土しかない。木も、水も、見渡す限り存在していなかった。まだ昼間なのか、太陽が出ている。ほのかに照らされる大地は乾いていた。

不意に後ろでふおん、と音がした。亜里沙が驚いて振り向くと、先ほど通ってきた穴が空間を捻じ曲げながら閉じようとしていた。見る間に穴は閉じていく。向こう側の世界がこちらの空気に隠され、やがて完全に見えなくなった。

ふと、限らない寂しさを感じた。もう帰れないのだという実感が沸く。もう少し皆の顔をよく見ておけば良かったと後悔した。

「こちらです」

ラグナが亜里沙を促した。

「急ぎましょう。陽が出ている間は、ヘンジファイル怨霊はあまり活動しないので
す」

亜里沙はなんとか頷き、自分から穴があった場所とは反対側へ踏み出した。

その後しばらくは無言だった。話題も見つからないまま、亜里沙は微妙に居心地の悪い沈黙をどうしようかと話題を探した。だが仮に見つかっても、一步前を歩くラグナの背中は見えない壁を感じさせ、話しかけるのを躊躇うのだった。

「喉が渴きませんか？」

突然ラグナが振り向き、声をかけた。亜里沙は驚いて心臓が飛び上がるのを感じつつ、平静を保った。

「え、うん、そういえば」

「もうすぐ泉があるんです。そこで一休みしましょう」

「うん」

亜里沙は唾を飲み込んだ。そういえば喉が渴いていた。それになんとなく小腹が空いてもいた。

少し進むと、泉が見えた。赤茶色から転じて黒い土の窪みが出来ていて、そこに透明な水が溜まっている。どうやって飲むのかと戸惑っていると、先にラグナが進み出て泉の淵に膝を着いて座り、両手で水をすくって飲んだ。ふとこちらを向き、亜里沙に向かって笑いかける。

「飲む時に飲んでおいた方が良いでしょう。昼間とはいえ、いつ怨霊フイルが出てくるか分かりませんし、ましてや夜の間は何も口に出来ませんから」

「そっか」

亜里沙は空返事をしつつ、ラグナから数歩離れた場所で同じように座り込んだ。恐る恐るといった感じで両手を水に差し入れ、そつとすくう。だが掌に入っていた水は、亜里沙が眺めている間に指の間から全て零れ落ちていった。亜里沙は再び水に手を入れ、今度はすくうと同時に顔を寄せて水を飲んだ。3口ほど飲むことが出来た。もう一度亜里沙は水をすくい、少しでも多くの水を飲もうと顔を寄せた。

「亜里沙さん」

口の周りの水を拭っていると、ラグナにいつもの優しげな調子で話しかけられた。最後の一滴をふき取ると、亜里沙は首を回してラグナを見た。

「何？」

「これを。少し早いですが、食料です」

ラグナが差し出したのは、棒状のクッキーだった。カロリーメイトのようなものだ。

「ここからは夜までずっと歩きます。今の内に補給して下さい」

「分かった」

亜里沙は頷くと、ラグナの手からクッキーを受け取り、すぐに食べた。どうやら自分で思っていたよりもお腹が空いていたらしい。ク

ツキーは乾いていたが少しだけ甘みがあつて美味しかった。そして今になって亜里沙は、ラグナが黒い斜め掛けの鞆を持ち歩いていたことに気がついた。コートが黒いせいか、ちつとも分からなかったのだ。

亜里沙があつという間にクツキーを一本食べ終えると、視界の端に新しいクツキーが映った。見ると、ラグナが苦笑いを浮かべながら差し出していた。

「すみません。僕としたことが、亜里沙さんを気遣えなくて。どうぞ心行くまで食べてください」

亜里沙は赤面した。節操も無くバリバリと食べてしまったことに今更気がついたので。

「あ、ありがとう・・・」

だがまだお腹が満たされていなかったなので、遠慮がちにクツキーを受け取ると、今度はゆっくりと頬張るように一口一口を噛み締めながら食べた。

「不思議ですよね」

隣で同じようにクツキーを頬張りながらラグナが穏やかに言った。

「幽霊ゴーストになつても、生きていた頃と変わらないんです。お腹は空くし、ぶつければ痛い。でも血は出ないし、3日3晩食べなくても痩せない。感じることは同じでも、見かけは変わらないんです・・・

怨霊痕ベンジフル・マークを除けば、ですが」

「怨霊痕ベンジフル？」

「怨霊ベンジフルに付けられた傷跡のことです。それだけはなぜか、後々まで残るんですよ」

亜里沙は、そつとラグナを見た。だが彼の左隣に座っている亜里沙からは、長い銀色の前髪が邪魔してラグナの表情は見えなかった。

第一曲 Part・6 寂しい空

それからまた、しばらくは無言で進むことに徹した。段々と陽が傾いていく。夜が近付いてきているのが、光の加減で分かった。先ほどの泉から何時間も経っているような気がするが、ラグナは一度も足を止めない。迷う事無く前へと進んでいく。亜里沙からすればここはただの岩山だが、彼には道が見えているのだろうか。

そう聞いたら、ラグナは振り向かず前方の空を指差した。

「あの星、見えますか？」

顔を上げると、前方の空の一点に、きらりと光る小さな星が見えた。

「うん」

「あれは目印なのです。あの星が僕達の頭上に来ると、死後の世界アフターランドへの接続が可能になります」

「ふうん・・・」

亜里沙は目測で距離を見た。

「結構遠いんだね」

「はい。少なくとも一日で辿り着けるところではありません」

亜里沙は落胆するのを感じた。ラグナはここで初めて振り向いて、穏やかな笑みを見せた。

「ですが、今回の旅は幸運なほうです。昼間とはいえ、一匹も怨霊ベンジフィールが出てこないんですから。普通なら2、3匹くらいは遭遇してしま

うんですが」

「そうなんだ・・・」

亜里沙は再び沸いてきた恐怖に寒気を感じながら、ぼそっと呟いた。

「このまま何も起こらずに終わると良いけど」

「そうですね」

ラグナは穏やかに同意した。

やがて陽が完全に沈み、空も大地も真っ黒になった。月がそろそ

ると顔を出している。

亜里沙はふと気がついた。この空は寂しすぎる。月と、目印である星しかない。

「この空、寂しいんだね」

「ええ。だからこそ、行き先が分かるのですが」

ラグナは短く答えると、足を止めた。つられるようにして亜里沙も立ち止まる。ラグナは振り返り、柔らかに笑った。

「今日はここまでにしましょう。もう夜です」

第一曲 Part 7 休息

ラグナは颯爽と黒いトレンチコートを脱ぐと、近くにあった浅い窪みに座り込んだ。レースのついた、だが女物には見えないブラウスにカーキ色の長ズボン。そんな姿で尻込みしている亜里沙に笑いかける。

「今日はここで野宿することにしましょう」

亜里沙は恐る恐ると言った感じで、ラグナから数歩離れたところに座った。ラグナの優しい瞳が見辛くて、前だけを必死で見据えた。だって、夜だ。良い年した健全な男女が、人っ子一人いない荒涼とした山道のと真ん中で野宿だ。健全な女子高生としては、警戒しない方がおかしいだろう。ラグナは今の所とても穏やかで、ともすると紳士的な少年だが、やはり腐っても男。まちがいが起こらないという確証は持てない。

そんな風に心配しながら肩を縮こまらせ、ちんまりと座っていると、ふと肩に温かみを感じた。目をやると、さっきまでラグナが羽織っていたコートだった。

「^{ベンジフル}怨霊対策です。保護色でよく見えなくなるでしょう？」

真っ白な、月明かりの下でも目立つブラウスを着ているラグナが笑う。亜里沙を少しでも安心させようと、精一杯の気遣いで。それは嬉しかったが、亜里沙は今度はラグナが心配になった。

「でも、これ私が着てたらラグナが……。私制服紺色だし、大丈夫だよ」

「どうぞお気遣い無く。僕は数時間ほど起きて見張りをしていますから。いざ^{ベンジフル}怨霊が現れた時、目を僕の方に向けさせるためにも、そのコートは亜里沙さんが着ていて下さい」

笑顔の裏に隠された何かを感じて、亜里沙は小さく息を呑んだ。

「寝ないの？」

「そんなことはありません。数時間経ったら、交代して頂く予定です」

す。それまでは亜里沙さんが休んでください」

そう言うと、ラグナは空を見上げた。小さな星が一つと、月しか掛かっていない寂しい空を。

今度は彼の右側に座っていたから、亜里沙はラグナの表情をまじまじと見ることが出来た。この空のようにどこか寂しげな、孤高の横顔。なぜか急に壁を感じ、亜里沙は慌ててコートを被って身を倒し、ラグナに背を向ける形で横になった。途端に眠気が襲い掛かる。気だるいその流れに身を任せ、亜里沙は瞼を閉じた。

第一曲 Part・8 亜里沙

嗅ぎ慣れた臭いがする。

(ここはどこだっけ)

亜里沙はゆっくりと目を開いた。見慣れた下駄箱が目に入る。すぐに気がついた。ここは学校だ。それも1階の、入ってすぐの昇降口。平均より背が高い亜里沙は、自分の腰よりも低い下駄箱を宛がわれて不満に思っていたのをよく覚えている。

(確かにいつも通りだけど、何か違う)

亜里沙はぐるりと周りを見回した。そして気づく。いつもは大勢の生徒が行き交い、明るく言葉を交わす騒々しい場所なのに、今は誰もいない。いるのは亜里沙だけ。

(教室に行かなきゃ)

なぜだかぼんやりと亜里沙は思った。素早く革靴を脱ぐと、腰を屈めて革靴をまとめて掴み、もう片方の手で自分の上履きを引き抜くと同時に革靴を押し込む。そのまま上履きを落すと、片方はひっくり返って裏側を亜里沙に見せた。もどかしさに苛立ちながら、足で直に上履きを転がして向きを直しつつ履いた。

両足共に上履きに収まったことを確認してから、亜里沙は走った。風のように走った。自分は今風なのだと思えた。いつもは途中で挫折して立ち止まってしまふ階段も、今だけは楽々と飛ぶように越した。

4階まで辿り着くとそのまま踊り場から廊下に飛び出し、左に曲がる。ここも誰もいなかったが、なんとなく予感がしていた。1組を通り越す。半開きになっているドアから中がチラリと見えたが、無人だった。2組を通り越す。こちらも無人。なぜか黒板が汚く落書きされていた。

3組の前まで来て、亜里沙は立ち止まった。ドアは閉まっている。小さな擦りガラスからは、中はよく見えない。刹那、全ての音が無

くなつたかのようにしんとなつた。亜里沙は意を決して取っ手に手を掛ける。そして勢いよく開いた。

「亜里沙！ いたいた、良かったー！」

最初に聞こえたのは、恋バナを持ちかけたらクラス中に秘密をばらした裏切り者の子の声だった。窓辺でいつもの女子達のグループで固まって、こちらに笑顔で手を振っている。

「ずっと待ってたんだよ？ どうしても分からない問題があつてさ」
横から腕を組まれた。見ると、さっきまで窓辺で同じように固まっていた女子達の一人、この間ひょんなことから口喧嘩になつてしまつた子だった。それを皮切りに、一斉にクラス中の皆が亜里沙に話しかけてきた。

「ねえ亜里沙、昨日のテレビでさあ」

「亜里沙、俺、ずっと前から亜里沙のことが・・・」

「ふえ〜ん、亜里沙あ〜！ 私、私D判定だったあ！」

見知つた顔がすごい勢いで現れては消えていく。その中には普段自分を亜里沙と呼ばない人も混じつていたが、別段不思議には感じられなかった。段々とクラスの懐かしい景色が薄れていく。脳の中に霧が立ち込めるような、ぼうつとした空気を吸い込む。

「亜里沙、元気にしてた？」

「亜里沙、お前勉強頑張つてるのか？」

クラスの子達に混じつて、なぜか両親の声まで聞こえてきた。なのに何故だろう。それすらも疑問に思わず、亜里沙はふつと笑つた。誰もが亜里沙の名前を呼んでいる。もう何も不思議に思えない。

「亜里沙」

「亜里沙」

「亜里沙」

「亜里沙」

「亜里沙さん！ 亜里沙さん！」

「・・・っ！」

亜里沙は目を開けた。夜の闇が雪崩れ込み、一気に現実に引き戻される。

そうだった。自分はもう死んだんだ。さっきまでののは全部夢で、今亜里沙は生まれ変わる為に死後の世界アフターランドへ行く途中だった。

亜里沙は、左肩に小刻みに震えている熱を感じた。首を廻して見ると、それは腕だった。

「ラグナ？」

彼は震えていた。左手で前髪に隠れた左目を押さえつつ、右手で亜里沙の左肩を揺すって起こしていたのだ。よく見ると、耳元に汗が垂れている。口元は苦しそうに歪んでいる。亜里沙は急に心配になった。

「ラグナ、どうしたの？体調悪いの？辛いなら寝て。見張り交代しよう」

だがラグナは、左目を抑えたまま首を振った。歯を噛み締めたその姿は、見るからに痛々しかった。

「・・・来た、んです」

やっとのことで、ラグナはそう言った。だがその声は小さすぎた。

「え？何？」

亜里沙はいぶかしむ。ラグナは再び、歯を噛み締めながら言った。

「ベンジフル怨霊が、近くに・・・このままだと、見つかります。・・・くっ」

ラグナは呻き、両手で左目を押さえ、背中を丸めた。あまりにも辛そうなので、亜里沙は二重の心配に見舞われて混乱した。耳を澄ませば、どこか遠くないところで獣が唸るような声がする。

「ラグナ、大丈夫？！ベンジフル怨霊が来たって、そんな・・・！どうしよう、私何も出来ないよ・・・！」

パニックのあまり彼の背を抱え込んだ亜里沙の手を、ラグナは強く掴んだ。

「・・・大丈夫、です」

やっとのことでそれだけ言うと、彼は身体を起こした。よろよろと

バランスを崩しつつも、なんとか二本の足で立ちあがる。亜里沙はそれをおろおろと見ているしかなかった。

「ラグナ……。でも、そんなふらふらじゃ……」

「大丈夫、ですから……」

ラグナは顔の右半面だけで、弱々しく笑って見せた。

第一曲 Part・9 怨霊と死神

ゆっくりと、ラグナは左目に当てていた手を離した。もう痛みは引いたのだろうか。

「亜里沙さん」

突然ラグナが決然とした口調で言った。さっきまで穏やかだった彼しか見ていない分、亜里沙は反射的に緊張を覚えた。

「何？」

「しばらく、そのコートを着てここにいて下さい。危なくなったらすぐに逃げて下さい。出来るだけ大声を出して。助けに行きますから」

「ちよつとラグナ、何する気？」

^{ベンジフル}「怨霊が僕達に気づきました。もうじき襲ってきます」

「ええっ?!」

亜里沙は恐怖のあまり心臓が大きく鼓動を鳴らすのを聞いた。ラグナが亜里沙に踵を返して背中を向けた、その時だった。

それは、出た。人の悲鳴が何重にも重なったような不快な鳴き声を発しながら。月光に照らされた大地よりも純粹に闇に染まった体は、2本の腕と2本の脚を持ち、人に近い姿をしていた。だが人よりも2回りほど大きい背中は曲げられ、頭と思われるところからはサメに近い、キバが並んだ口が大きく開けられていた。眼球は飛び出すかのようだ。苦しみのた打ち回るような動作を繰り返しながらラグナに踊りかかる。いちいち聞かなくても分かった。これが怨霊^{ベンジフル}だ。

亜里沙は声も出なかった。震える足で、立っているだけで精一杯だった。心臓が波打つ。息が苦しい。このままラグナが死んでしまふのではないだろうか。そうしたら次は亜里沙だ。そう思うと更に恐怖が募る。

ラグナは、亜里沙に背を向けた状態で左腕を上げた。そして、左

目に掛かっていた長い前髪を後ろに払った。

それから後に起こったことは、なんとも説明しがたい不思議なものだった。後姿からだったので何とも言えないが、彼の左目と思われるあたりが妖しげな赤い光を発した。と思うと突然同じ場所から赤い光線が放たれ、今にも飛び掛らんとしていた怨霊の身体を貫いた。

だが光は所詮光、何の意味も持たない。人間的な思考に駆られて心なしか落胆していると、怨霊の体の内部が突如ぼうつと光った。それは、先ほどラグナが発した赤い光線と同じ色だったので、亜里沙はまさかと息を呑んだ。

そのまさかだった。次の瞬間、怨霊の体中に赤い光が火花のように現れ、そして消えた。怨霊の体の至るところを駆け巡り、内部に潜り込んで消えたと思えば別の場所から現れる。怨霊は再び、聞くに堪えない悲鳴のハーモニーを発した。それが一秒間続いた後、全ての光が怨霊の体内に収まった。怨霊も痛みが引いたのか黙り込む。だが反撃する暇も無く、怨霊は火花のように音を立てて飛び散った。「……え？何？何が起きたの?!」

当然動揺するのは亜里沙である。飛び散ったそれらは既に塵となり、もはや怨霊の面影など欠片もなかった。手をかざすと、掌に塵が落ちてくる。それはまるで、雪のように。一体何なのだろうとまじまじと眺めていると、背後で悲鳴の共鳴が聞こえた。

恐る恐る振り向くと、そこに別の怨霊がいた。それも2匹。悲鳴のような声なのに、舌なめずりをして獲物の寸評をしているように思えるのは何故だろう。

亜里沙は本気で死の恐怖を感じた。横を向けば車が勢いよくこちらに向かっていた、あの時と同じように。あの時は、悲鳴を上げることすら出来なかった。転んだ膝が痛くて、立つこともままならなかった。だが今は、守ってくれる存在がいる。反射的に亜里沙は叫んだ。

「ラグナ！」

第一曲 Part・10 目

ラグナがさつと振り向いた。

だが感じたものは、安心感以上の恐怖だった。

「ラグナ・・・？」

亜里沙は呆然とラグナを見つめた。振り返ったラグナの長い前髪は、今は耳の後ろに掛けられている。この時初めて亜里沙は、ラグナの顔の全面を見た。

驚きのあまり、背後の怨霊も忘れて息を呑む。

今までどうして彼がその目を隠していたのか、分かった気がした。

右目は亜里沙と同じ、白地に黒い瞳。だが左目は、黒地に赤い瞳だった。

充血だけでは済まされない。異常なそれが、そこにあった。

「うう・・・」

ラグナは苦しそうに顔を歪めた。それすらも今は辛苦より不穩さが伺えて、亜里沙は思わず身構えた。

「うあーっ！」

突如ラグナが大声で叫んだ。左目が赤い光を発する。次の瞬間、彼の目から先ほどと同じ赤い光線が放たれた。

何の心の準備もしていなかった亜里沙は、運良く動くことが出来なかった。お陰で光線は亜里沙の肌すれすれを横切り、背後の怨霊に命中した。少し遅れてやってきた風圧で、髪がふわりと逆立つ。

後ろの両側からぼう、と灯りを感じた亜里沙が振り向くと、怨霊の体中を赤い光が巡っていた。怨霊が不快な多重音の悲鳴を上げてのた打ち回る。亜里沙はそろそろと後ろに下がった。

一際大きく鳴いたと思うと、怨霊は黙り込んだ。ぎろりと亜里沙を睨みつける。亜里沙は驚いて足元がぐらつき、あやつく転ぶ所だった。

心臓が止まりそうだ。いや、逆に今度はばくばくと音を立てて騒

ぎ始める。

見たくなかった事実が、あり得ないけど本当かもしれない真実を引きずり出す。

花火のような音を立て、2匹の怨霊は散った。残るのはさつきと同じ、黒い無数の塵。

亜里沙はほつと息をついた。今になって、緊張のあまり肩が上がっていたのに気づき、しっかりと下げて落ち着ける。心の中を整理しようと言いつつ、振り返って顔を合わせるのが気まずいように本能的に感じた。・・・ラグナと。

「うっ・・・」
後ろで呻き声が聞こえた。亜里沙は素早く振り向いた。身を強張らせ、警戒態勢を全開にして。

視界に映ったラグナは、左目を抑えて全身を震わせていた。亜里沙は目を走らせる。大丈夫、もう前髪は元に戻っている。

もう一度その目を見てしまったら、きつと確信を持ってしまう。うろたえてラグナを見ていると、ラグナの膝ががくんと折れた。力無く、乾いた地面に頭から倒れこむ。亜里沙は息を呑み、恐れを忘れて駆け寄った。

「大丈夫?!」
「・・・」

彼は、まだ意識があるようだった。歯を食いしばり、おそらく身体に掛かっているだろう何らかの負担に堪えていた。かなり辛いらしく、前髪の掛かっていない彼の顔の右半分には汗がじつとりと湧いている。

「ラグナ・・・」
心配しながらも、先ほどの目を怖れて背筋に寒気を感じた。当たり前のように背をさすろうと伸ばした手を、戸惑いそのまま空中に迷わせる。

どうしよう、と唇を噛んだ。これでは、また怨霊が来た時に二人とも難なく襲われてしまう。

「・・・すいませ、ん。大分・・・疲れてしまった、ようです・・・」
ラグナが小さく言った。その声もとても辛そうで、亜里沙は本気で彼が心配になってきた。

「辛い？頭痛い？横になって、しばらく寝てて。朝まで私が起きて見張ってるから」

「はい・・・」

ラグナは身体を仰向けにして寝転がった。右目の黒が、空の漆黒と混ざり合って不思議なコントラストを描く。魅入っていると、その瞳は自然と閉じられた。苦しそうに、深く、長く息を吐く。

大分落ち着いた様子を見て、亜里沙も安堵した。ラグナの横に腰を落ち着け、体育座りで夜空を見上げる。闇は、まだ濃い。当分明けそうになかった。徹夜に近いが、ラグナがこんな状態では亜里沙が起きていられないだろう。いや、ラグナが元気だったとしても、時間をきっちり配分して見張りをしようという心持はある。あるのだが、やっぱり何もせず起きているというのは手持ち無沙汰で、それに加えて今まで受験勉強で休む間もなかったからか、今の自分にもすごい違和感を感じる。

ちらりと横で眠るラグナを見る。どうしても視線が行ってしまうのは、彼の寝顔のような右半分ではなく、前髪で大部分が覆われた左半分。

(さっきのあの目・・・)

黒地に赤の、彼の左目。

(あれ、怨霊ベシツフルの目と同じだった・・・)

怨霊が散る直前、恨めしげに睨んだあの目と、寸分違わず。

ずっと眺めているのは、寝ている人であっても失礼に値するだろうと思ひ、亜里沙は再び夜空を見上げた。この空を見ていると、ゆっくりに考え事が出来るような気がする。

(どういこと?)

「不思議、ですよね・・・?」

掠れた声が地面の方から聞こえた。亜里沙は心臓が止まるかと思っ
た。びくつと身体を強張らせ、勢いよく顔を向けた。

「起きてたの?!」

「まだ目が痛くて・・・」

弱々しく笑う顔はどこか痛々しい。彼の右目は、聞かなくても亜里
沙の考えていることを見抜いていることをありありと表していて、
亜里沙は気まずさに目を逸らしたかったが、好奇心が勝って動けな
かった。

「そうですね。亜里沙さんも、死神の実態くらい知っておかないと、
アフターランド死後の世界に行った時住民に蔑まされてしまいますね・・・」

一人で納得したラグナを、亜里沙は穴が開くくらいに見つめた。

ラグナは亜里沙と直接目を合わせようとはせず、夜空をぼんやり
と眺めた。それとも、まだ首を廻す元気がなかったのかもしれない。
亜里沙の射すような視線を分かっているながら、ラグナは今日で一番
穏やかな笑みを浮かべた。

「お話ししましょう。死神の話を」

第一曲 Part・11 真実

涼しい風が吹き付け、二人の髪をさらさらと撫でる。亜里沙もラグナも互いに顔を合わせようとはせず、漆黒に染まった夜空を眺めていた。静かな空気の中、亜里沙はさつきとは別の意味での緊張を感じていた。露わになったラグナの異様な左目。それと同じ色の怨霊の瞳。この共通点が、彼が死神であるということに関係を持っていることはきつと確かだ。そして今から、彼自身が真実を語るという。何も感じないわけがない。

ラグナはもう、すっかり落ち着いていた。穏やかな中に見え隠れしていた怨霊ベンジフルに対する警戒心も、今では最初から無かったもののようにうだ。彼は今、ただの一人の少年だった。死神でもなく、幽霊ゴーストでもない。ただ荒れた土地の中に自然と出来た窪地に身を休め、空を眺める少年だった。

ふと、隣でラグナが動く気配がした。亜里沙が気になって彼に目だけを向けるとラグナが口を開いたのは、ほぼ同時だった。

「亜里沙さん。これを見てください」

亜里沙は首を廻してラグナの方を向いた。向いてしまってから、後悔した。ラグナは、長い前髪を掻き揚げて左目を亜里沙に見せようとしていた。

うるたえ、目が泳ぐ。彼は左目を閉じているとはいえ、いきなりこのことに対処しきれず、あからさまに顔に困惑が出る。気まずい空気を不本意ながら作り出してしまった自分に嫌悪した亜里沙とは対照的に、ラグナは本当に、心から優しい笑みを見せた。

「すいません、驚きますよね。でも、見ていただきたいんです」

亜里沙の心の中で、何かがコトリと音を立てて嵌りこんだ。すると、亜里沙自身がどこかに嵌りこんだような、落ち着いた安心感が全身に溢れた。全てが許されるような、心からありのままにいられることを受け入れられた気持ち。それがとても心地よくて、亜里沙はつ

い彼が望む場所に目をやってしまった。

彼の左目は、ぴったりと瞼が閉じられていた。開いたらまたさつきと同じような、黒い眼球に赤い瞳が亜里沙を見据えるのだろうか。それはその目の持ち主ではない亜里沙には分からなかった。だが閉じられた状態であつても、衝撃的なものであることに変わりは無かつた。彼の目には、縦にくつきりと裂かれた痕があつた。当時は大量に出血しただろうし、目にも危害が及んだだろう。生々しい傷痕は、昔から変わっていないように思われた。

亜里沙が固まっているのを微笑みで受け止めながら、ラグナは前髪を元に戻した。元のただの穏やかな彼が戻ってきたように思えて、つい落ち着いて息を吐いてしまふ。だが次の彼の一言は、逃げられない現実を亜里沙に突きつけた。

「僕の左目はかつて、怨霊ベンジフルに傷つけられたんです。つまり、これは僕の怨霊痕ベンジフルマーク」

亜里沙は何も言うことが出来なかつた。ゆつくりと、彼の言葉が水のように浸透していく。それはさっきまで亜里沙が悶々と考えていたものと見事に合致していた。何故だか申し訳なくなつて、目を逸らす。

それなのにジェナスは、辛そうな溜息一つつかない。それどころか、口調が段々と明るくなつていく。

「死神っていうのは、簡単に言えば怨霊痕ベンジフルマークを持った幽霊ゴーストのことなんですよ。怨霊痕これを身体に宿してしまつた以上、じつとしていゝことなんて出来ません。こうしている間にも、身体は刻々と怨霊ベンジフルに近付いて行くんですからね。一刻も早く、次なる石ネクストを7つ揃える必要があつたのです」

亜里沙は変わらず黙っていた。こんな時こそかける言葉があるだろうに、見つからない。

「次なる石ネクストは、死後の世界アフターランドよりも悪夢の道の方が見つかりやすいってことはもう言いましたよね。・・・迷っていることなど、出来ませんでした。危険だろうがなんだろうが、苦しみを経て怨霊ベンジフルに成り

果てるよりはずっとマシですよ。不幸中の幸いと言いますが、怨霊ヘンジフル痕のお陰で特異な力も発揮出来ますからね。たとえ怨霊ヘンジフルに遭遇してしまっただとしても、その場しのぎくらいな可能です」

『死神は怨霊ヘンジフルに対抗し得る特別な力を使えるんです』

(違う)

亜里沙は思った。胸の奥が熱くなる。

(その場しのぎなんてものじゃない)

先ほど、呆気なく分解されてしまった怨霊達ヘンジフル。あれは、その場しのぎで済む力ではない。成長しているのだ。ラグナが、怨霊ヘンジフルとして「そうして次なる石ネクストーンを探すうち、彼らは気づいたのです。この力で守ることが出来る、自分自身ではないもう一つの存在を」

亜里沙は小さく息を呑み、ラグナの顔を見た。丁度ラグナも亜里沙の方に首を傾げる。二人の視線が、交わった。

「それは、幽霊あなたです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9167h/>

死神の葬送曲

2010年10月12日12時23分発行